

優秀賞

【特別活動】

他者と協力して課題を解決する児童の育成 —卒業単元を通して—

神戸大学附属小学校

あか がわ みね ひろ

赤川 峰大 (写真中)

あずま なつ き
東 夏姫 (写真左)

きの した かける
木下 翔 (写真右)



I はじめに

1 社会的背景

児童が社会で活躍する頃は、今以上に変化が大きく、予測が困難な時代になるといわれている。このような時代をよりよく生きるための資質・能力を育てるために、学校教育には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。とりわけ特別活動においては、様々な集団活動に主体的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わり役割を担うようにすることで、他者と協働して課題を解決する資質・能力を育むことが期待されている。

しかし、次期学習指導要領においても指摘されているように、これまでの特別活動は、「なすことによって学ぶ」ことを方法原理とし、各学校において特色ある取組が進められている一方で、各活動・学校行事において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる。

2 主題設定の理由

前述の指摘を視点にこれまでの自身の実践を含めた本校の特別活動を振り返ると、「主体的な学び」の捉えが課題にあがる。次期学習指導

要領解説に「特別活動の目標や内容で示している資質・能力は、自主的、実践的な学習を通して初めて身に付くものである」と示されているように、資質・能力を育むためには主体的な学びは必須である。しかし主体的な学びは目的ではなく、主体的な学びを通して、資質・能力を育てることが目的である。本校の特別活動の実践では、これまでその点の整理が十分ではなかった。そのため、主体的な学びを中核にした学習を展開するという理念は共有できているにも関わらず、児童自らが主体的に進めることを重視しすぎるあまり、ときに子ども任せのような状態になり資質・能力の向上には結び付きにくいことがあった。この状態を本研究では「主体的な学びが機能していない状態」と考え、他者と協力して課題を解決する資質・能力を向上させるために、主体的な学びをどう機能させるかについて研究することとした。

II 研究の内容

1 主体的な学びを機能させる要件

主体的な学びを機能させるために必要な要件を、次期学習指導要領とこれまでの実践での児童の様相をもとに仮説として設定した。

[要件 a] 児童が活動の意義を理解している

[要件 b] 児童が考える手がかりをもっている

[要件 c] 児童が試行錯誤する時間が確保されている

次期学習指導要領解説において、特別活動における主体的な学びとは、「学ぶことに興味・関心を持ち、学校生活に起因する諸課題の改善・解決やキャリア形成の方向性と自己との関連を明確にしながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の活動を振り返りながら改善・解消に励むなど、活動の意義を理解した取組」と記述されている。これをもとに、主体的な学びを成立させる「要件 a」を位置付けた。

「要件 b」「要件 c」は、本校のこれまでの実践での児童の様相から導き出した仮説である。前述の本校の課題は、考える手がかりが示されていない状態で児童に多くのことを考えさせようとした結果、児童が試行錯誤する時間を十分確保することができず、資質・能力の向上につながりにくかったのではないかと考えた。

2 要件を成立させるための取組

前述の三つの要件を成立させるために、本研究では、「単元開発」と「教えることと考えさせることの明確化」に焦点をあてる。要件との関連は表 1 のとおりである。

表 1 主体的な学びを機能させる要件と取組の関係

取組	主体的な学びを機能させる要件
単元開発	a
教えることと考えさせることの明確化	b c

(1) 単元開発

本研究では卒業に関わる各活動等を構造的に整理することによって、各活動等の関係性や意義を児童が理解して進める単元を開発する。

一般的に小学校では、第 6 学年の卒業に関わって様々な学習や活動が行われる。表 2 は平成 27 年度に本校で実施された卒業に関わる学習・活動である。

多くの学校で実施されているこれらの学習や活動は個別に充実は図られているものの、一般

に各活動等の関係性や意義の理解が十分でないという課題が見られる。その点を改善する単元を開発しようと考えた。

表 2 平成 27 年度 卒業に関わる学習・活動

学習・活動内容	教科等との関連
謝恩会	家庭科
校内清掃	家庭科
お別れ遠足	特別活動
卒業記念品の購入	特別活動
卒業制作	図工
卒業式の練習	特別活動
卒業式の歌の練習	音楽

(2) 教えることと考えさせることの明確化

本研究では、活動の特性に合わせて教えることと考えさせることを明確化することが、「要件 b」「要件 c」につながると考えた。児童に考えさせることが明確であれば、そこから逆算することで考える手がかりを事前に教えることができる。また活動時間との関連で児童に考えさせる事柄を決めれば、児童に試行錯誤させる時間を確保することができる。よって教えることと考えさせることの明確化が必要だと考えた。

III 実践

1 卒業単元の開発

卒業単元として、次のような単元を開発した。単元計画は表 3 のとおりである。

表 3 単元計画

学習過程	主な学習活動
単元の目的の共有	卒業するにあたって表現したい自分の「思い」を交流し、単元の目的を共有する。
単元の見通し	単元計画を立てるとともに、担当する実行委員を決める。
計画	各実行委員に分かれて活動目標や活動内容について話し合う。

提案	各実行委員が話し合った活動目標や活動内容を提案し、全体で練り上げる。
実践	各実行委員の進行で、活動する。
振り返り	各実行委員の企画した活動によって、どのように思いを実現することができたのか振り返る。

以下に各学習過程の概要を示す。

(1) 単元の目的の共有

単元の導入では、「卒業する私たちの思いを込めて」という単元名を示した後、卒業するにあたって大切にしたい“思い”を個人で考え、学年全体で交流、共有することから始めた。それぞれの児童の意見をグルーピングすると、「思い出」「感謝とエール」「決意」の三つにラベリングされた。この三つの思いを実現するという単元のねらいを全員で共有した。その後、これまでの卒業生が行っていた活動の内、人的、物的な諸条件を考え、本年度実施することが可能な活動等を教師から紹介した。活動内容は次のとおりである。

卒業制作、卒業行事、謝恩会、同窓会企画、卒業記念品の贈呈、メッセージの作成、卒業式の実施

続いて、提示された活動の意義を全体で考える時間を設けた。共有した「思い出」「感謝とエール」「決意」を視点に意義が感じられない活動は見直すことを可能とした。話し合いの結果、児童はそれぞれの活動の意義を図1のように整理して三つの思いに位置付けた。

「思い出」のカテゴリーとしては、思い出を表現するための“卒業制作”、思い出を作るための“卒業行事”、将来思い出を振り返るための“同窓会企画”と位置付けた。

「感謝とエール」のカテゴリーとしては、親への感謝の気持ちを伝える“謝恩会”、学校や在校生への感謝とエールの気持ちを伝える“卒業記念品”と“メッセージ”と位置付けた。

そして「卒業式」は、「思い出」「感謝とエール」「決意」の三つの思いを表現する場として位置付けた。このようにそれぞれの活動の意義を共有して、単元が始まった。

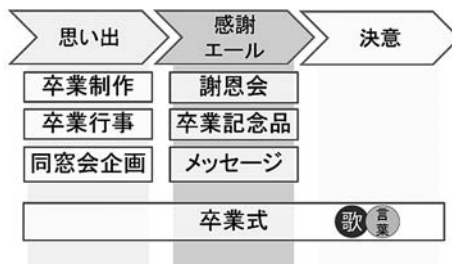


図1 児童が整理した各活動の意義

(2) 単元の見通し

様々な活動を行うために実行委員制度を採用し、全員がいずれかの実行委員に所属して、単元を作ることを共有した。以下の実行委員を設定し、所属を決定した。

表4 実行委員一覧表

実行委員名	内容
卒業行事	学年全員で行う思い出づくりのイベントの提案
同窓会企画	思い出を振り返るための同窓会の提案
謝恩会	保護者等に感謝の気持ちを伝える謝恩会の提案
卒業記念品	在校生等に感謝とエールの気持ちを伝える品の提案
メッセージ	在校生等に感謝とエールの気持ちを伝えるメッセージの提案
卒業式歌	三つの思いを表現するための卒業式の歌の提案
卒業式言葉	三つの思いを表現するための卒業式言葉の提案
卒業式本部	三つの思いを表現するための卒業式全体の提案

それぞれの実行委員会が主体となり、表3の単元計画にあるように、計画、提案、実践するという単元全体の見通しを共有した。

(3) 計画

実行委員会に分かれて、活動計画を立てた。提案準備は、授業時間での活動は行わず、休み時間の活動とした。実行委員会ごとに担当教員を決め、適宜指導や助言を行うこととした。担当教員には、学年団の教員の他、教科との関連性を重視して、音楽担当教員、家庭科担当教員にも担当していただいた。

(4) 提案

提案は、各実行委員が進行を行った。実際の提案会では、実行委員会が想定していなかった質問や意見が出され、その場で合意されない場合もあった。その場合は、各実行委員会でもち帰り、検討し、再提案する手順にした。全体の合意をもとに学習を進めることができるようにするためである。多くの実行委員会の提案では再検討事項が出てきた。再提案については、帰りの会等を活用して実施することを基本としたが、時間的に難しい場合は、別途授業時間を割り当てることもあった。

提案会では実行委員会の特性ごとに、様々な提案方法がとられた。大きく分類すると、以下のような三つの提案の型が見られた。

【提案→検討型】

卒業式歌実行委員は、音楽専科の教員の支援で、「思い出」「感謝とエール」「決意」それぞれの思いを表現するのにふさわしい曲をそれぞれ2曲ずつ準備していた。提案会では実際に曲を聞いて、2曲の内のどちらを採用するかについて全体で検討した。事前に実行委員会で原案を練り、提案し、全体で検討するという【提案→検討型】であった。

【募集→提案型】

図2は、卒業式言葉実行委員会の提案の様子である。卒業式の言葉のめあてと作成の手順が実行委員から提案された。めあてとして「思い出」「感謝とエール」「決意」が相手に伝わる答

辞の言葉を作るということが共有された後、卒業式の言葉として表現したい内容について「思い出」「感謝とエール」「決意」の三つを視点に全体から意見をもらい、それをもとに実行委員会が原稿を作るという手順で提案された。図3は、全体から表現したい内容の案を集めている場面である。全体から意見を先に募集した上で、それを実行委員が練り上げて提案する【募集→提案型】であった。



図2 卒業式言葉実行委員の提案

【条件提示→提案委託型】

卒業行事実行委員会は「全員がおもいっきり楽しめる遠足をつくる」という活動のめあてを提案し全体で共有した後、遠足の行き先を決めた。行き先は実行委員が提案するのではなく、全体から提案者を募りプレゼンをして決定するという手順であった。図3は「予算」「活動時間」「往復にかかる所要時間」「活動のめあてが達成できる場所」という四つの条件が実行委員から提案され、条件に合う目的地を次回プレゼンして目的地を決定することになった。実行委員が条件提示を行った上で、プレゼンを希望する人が提案をする【条件提示→提案委託型】であった。



図3 卒業行事（遠足）実行委員の提案

(5) 実践

各実行委員による実際の活動の概要は、以下のとおりである。

卒業行事として、**図4**のように卒業行事として京都へ遠足を実施した。

同窓会企画としては、**図5**のように、同窓会の案内プリントを作成するとともに、20歳の同窓会で開封するタイムカプセルを準備し、思い出がよみがえる物品と大人になった自分への手紙づくりを提案し、実行した。



図4 卒業行事（京都への遠足）



図5 同窓会の案内プリント

謝恩会は、**図6**のように謝恩会を実行し、保護者の方への感謝の気持ちを伝えることができた。

卒業記念品としては、体育館に「校歌額」を卒業記念品として贈ることを提案し、寄贈した。**図7**は実行委員会が企画したお披露目会で校歌を歌っている場面である。



図6 謝恩会



図7 卒業記念品（校歌額）披露

メッセージ活動としては、在校生への感謝とエールをメッセージにして、学校に掲示した。

全体で検討し、決定した卒業式の歌と言葉は、担当教員の技術的な指導と実行委員の進行により練習を進め、卒業式で表現した。

卒業式本部実行委員は、卒業式の練習全体を運営した。

(6) 振り返り

振り返りは、それぞれの活動が終わったときと、最後の活動である卒業式の後に単元全体の振り返りを行った。それぞれの活動が終わったときの振り返りは、「実行委員会ごとに設定した活動のめあてが達成できたかどうか」という視点で振り返った。単元全体の振り返りでは、「実行委員会があったからこそ実現したこと」という視点で振り返った。他者と協働して課題を解決する資質・能力の向上が目的であったため、振り返りにおいて他の実行委員会の取組と、単元目標を関連付けさせようと考えた。

2 教えることと考えさせることの明確化

(1) 主体的な学びを機能させる場の設定

まず、児童の主体的な学びを重点的に発揮させる場を表5のように「進行」「計画」「内容」の三つで捉え、実行委員会の特性に応じてどの部分を児童に考えさせるのかを考えた。

表5 主体的な学びを機能させる場

場	主な活動
進行	話し合いの司会や進行をする。
計画	計画を立てたり、修正したりする。
内容	活動内容を考える。

本稿では、卒業式本部実行委員を事例にあげ詳細を述べる。卒業式本部実行委員は卒業式の全体について考える実行委員である。しかし卒業式は儀式的行事であるため、お別れ遠足等とは異なり内容の自由度は少ない。また、限られた練習時間の中で、儀式的行事としてある程度の質も求められる。よって卒業式本部実行委員については、卒業式でどのような活動をするかという「内容」を考えさせるのではなく、自分たちの達成度に応じて「計画」を立て、計画に従って練習を「進行」する段階を重点的に考えさせることで、主体的な学びを機能させようとした。

卒業式の練習開始時に、「思い出」「感謝とエール」「決意」の三つを態度でも表現する卒業式にするということを改めて児童と確認した。いたずらに形式的な卒業式を作ることが目的とならないようにするためである。そして、練習内容一覧表(表6)を全員に配布した。卒業式練習として必要な内容11項目と、ポイントとして示した評価規準を共有するためである。その後、教師が評価規準(ポイント)について指導を行った。

11項目の教師の指導を2月26日までの5回で終えた。卒業式本部実行委員会にはその後の計画を考えさせた。卒業式までの日程と、卒業式の練習として確保している時数を明記し、表7の練習計画表を共有した。なお、確保している

表6 練習内容一覧表(一部抜粋)

練習内容	ポイント
①起立の仕方	姿勢(両足、へその3点/視線/静止/足はかかとをつけてつま先開ける)
②礼の仕方	姿勢(ななめ下に視線を落とす/手は太ももに固定/背中から頭までは一直線)
	タイミング(1、2で下3で上げる/座るときは4で座る)
③着席の仕方	姿勢(深く腰をかける/両足を地面につける)
④式辞・祝辞の受け方	起立のタイミング(【前】登壇者がステージに登壇する一歩目【後】話の終わり)
	着席のタイミング(【前】演台で礼をした後【後】階段を降り切った地点)
⑤歩行の仕方	姿勢(背筋をのばす/視線はななめ上で決める)
	歩き方(腕は肩から動かす) 曲がるときは、一度静止して、90度角度を変える
⑥呼名の仕方	声の大きさ(普段から鍛える)
	姿勢(返事をしてから動き出す)
⑦証書授与(もらい方)	(礼→左足から前へ→左手→右手→上に掲げる→左手で曲げて持つ→左足から下がる→礼→左足から移動)

時数は最大の時間数であり、必要がなければ練習する必要はないと伝えた。共有している評価規準をもとに、自分たちの動きを観察することで必要な練習を実行委員が計画し、提案していった。実行委員以外の児童からも意見を集め練習計画を決定し、児童だけで練習を進めていった。5年生との合同練習においても、実行委員が進行したため、教員は前に立って指示する場面はなかった。このような児童の様相を生むことができた。

図8、9は卒業式についての児童の振り返りである。図8の児童Aは、「4つの思いを表すために姿を整えることができました。」と記述している。また図9の児童Bは、「言葉で少しまちがえた所はあったけど、そんなことより私

表7 練習計画表（一部抜粋）

月	日	曜	予定	T	練習内容
2	19	月	(卒業式の練習開始)	5	①②③④
	20	火		3	④⑤⑥
	21	水			
	22	木	(卒業のことは役割決定)	4	⑦⑧
	23	金	(清掃活動)	1	⑨
	24	土			
	25	日			
	26	月	(卒業文集完成)	6	⑩⑪
	27	火		3	
	28	水			
3	1	木	提案【卒業行事⑤】	3	
	2	金	(卒業制作完成)	4	
	3	土			
	4	日			
	5	月		5	
	6	火		5	
	7	水		5	
	8	木		34	合同練習
	9	金	謝恩会		
	10	土			
	11	日			
	12	月	卒業行事	(5)	
	13	火	卒業行事(予備日)	5	
	14	水	卒業式予行	123	
	15	木		3	
	16	金		3	
	17	土			
	18	日			
	19	月		5	
	20	火	卒業式		

卒業式 実行委員会

4つの思いを乗すために姿を整えることが出来ました。歩く姿や礼等、言葉は弱しなくても姿で伝えることができたと思います。

図8 卒業式についての児童Aの振り返り

卒業式 実行委員会

おぼろけは小さい気を守りぬいた。言葉と少し手が足らな所は、たいていおぼろけの私達の思いを伝えることができてよかったです。

図9 卒業式についての児童Bの振り返り

達の思いを伝えることができてよかったです。」と記述している。この振り返りの記述から、卒業式の細かな動きは単元目標である「思い」を表現するためであること、そして形式を間違えないことが大切なのではなく、「思い」を伝えることが重要であることを児童は理解していたと捉えている。

3 提案会における合意形成のための支援

本研究で目的とした他者と協力して課題を解決する資質・能力は、多様な考えを認め合った上での合意形成を通して育まれるものである。従って、合意形成を支える方法についての指導と支援を充実させた。

(1) 提案会の運営手順

図10の進行の手順で提案会の運営するように指導した。

- ①実行委員会からの提案（めあて、活動内容）
- ②フロアからの質問→実行委員の回答
- ③フロアからの意見→全体での協議
- ④合意事項の確認

図10 提案会の運営手順

①の提案では、はじめに活動のめあてについて提案し、その後活動内容について提案するという手順で実施させた。

②③については、まず質問を受け付け、質問を通して提案に対する疑問点がなくなった上で意見を受け付ける手順を進めるようにさせた。質問と意見が混在することによる議論の混乱をさけるためである。また③の意見では、賛成意見も積極的に発言するように促した。賛成意見を理由とともにフロアが述べることで、当該の実行委員ですら想定していなかった活動の意義が共有されると考えたからである。

(2) 提案者、参加者への支援

提案者の児童には表8の視点での支援、提案者以外の参加者の児童へは表9の視点で教師は支援を行った。これは提案会の中で実際に見られた合意形成のために有効だった児童の様相を教師が蓄積して作成したものである。毎回の提案会の最後に、その時間において合意形成に有効だと思われる児童の様相を教師が価値付けした。合意形成につながる方法について児童が実感を伴って理解できるようにすることをめざした。

表8 提案者への支援の視点

1	発表者は原稿を持たない。自分の言葉で語ることで、相手に内容だけでなく思いが伝わる。
2	提案のときは、理由を必ず伝える。
3	提案をして、質問と意見を考える時間をとる。そのあと、質問の時間、意見の時間の順に分けてとる。
4	質問は全員あるとは限らない。したがって、司会者は、「質問がある人？」と尋ねる。
5	意見は全員もつことを前提とする。したがって、司会者は、「意見がある人？」とは聞かない。「意見をください」と聞く。挙手が少ない場合は、「もう少し時間がいらしますか」と時間をとる。
6	賛成意見が続く場合、立場を変える。「今賛成意見が続いていますが、反対の立場の人はいますか」
7	何が話題になっている曖昧になったときは、論点を整理する。
8	提案に対する代案や、他の意見があり、提案が根本から考え直さなければならない状況のとき、理念のみ共有する。例えば、1年生との思い出を作るために、給食を1年生と食べるという提案をし、給食より一緒に遊ぶほうがいいのかなどの意見が続いた場合、「1年生と思い出をつくるために何かイベントをやるということについては賛成ということでもいいですか」と一段抽象化してまとめる。

9	司会者と質問・意見者の一問一答にならないように、「関連してありますか」と司会者は尋ねる。
10	検討していない意見については、必ずもち帰る。

表9 参加者への支援の視点

1	フロアのマナーとして、話し合いのときには、挙手などの意思表示を必ずする。
2	提案者の意図をくんで聞く。枝葉についての質問や意見に終始するのではなく、大きな目的や傾向について賛同するのであれば、まずそれを表明する。
3	質問をするときは、目的に照らして質問する。
4	質問をするときは、本人の思いを一緒に伝えたと質問の意図が伝わって答えやすい。

4 教職員の意思統一のための取組

これらの取組は、支援にあたる教職員全ての意思統一がなければよりよく機能しない。そこでこれまで述べた主体的な学びを機能させる取組等について、事前に教職員で話し合いを重ね、表10のようにまとめた上で、一貫した支援ができるようにした。

表10 教職員の共通理解のための文書（一部抜粋）

	卒業式本部	メッセージ	卒業行事
担当	〇〇	〇〇	〇〇
主体的な学びを機能させる場	計画進行	計画	内容
教師の支援	◆本年度の式の内容とポイントを記した文書の作成 ◆計画を立てるための予定表の作成	◆諸条件の設定（期間、範囲）	◆諸条件の設定（補助金額、時間等） ◆過去の場所の提示
提案内容	◆全体の目標、キャッチフレーズの設定 ◆卒業式の計画	◆メッセージを送る相手 ◆メッセージの形式 ◆集め方 ◆期限	◆場所の選定手順 ◆場所の選定（主な活動内容とセットで） ◆条件（値段、時間帯）

提案後	◆卒業式の練習の進行 ◆提案会の運営	◆メッセージシートの準備 ◆書く相手の割り振り ◆回収 ◆誤字脱字のチェック	◆しおりの作成 ◆事前説明 ◆当日の進行、振り返り
留意点	はじめに、短い時間で教師が卒業式の動きを教える。その後の計画を考えさせた。	1人あたりの書く分量が多くなりすぎないようにする。効率的でない方法は改めさせる。(色紙等)内容的な問題は、必ず教師がチェックする。(誤字脱字はこの限りではない)	場所について、参加自由のプレゼンをさせたい。場所選定を通して、条件を考えて選定する姿を生みたい。

IV 成果と課題

本研究では卒業単元の学習を通して、児童に他者と協働して課題を解決する資質・能力を育むことを目的とした。成果と課題について考察する。

【成果1】

実行委員制度によって、全児童がいずれかの実行委員に所属する仕組みによって、児童は当事者意識をもって単元の学習を進めることができた。

図11の児童Cは「それぞれが実行委員になった事で、それぞれが思いを持って卒業式にいとむ事ができた」と記述している。

また図12の児童Dは、「任せきりにならず1人1人が努力してつくりあげられました。」と記述している。本単元では、全員がいずれかの実行委員に所属するという仕組みで学習を行ったことで当事者意識を高めることにつながったと考えられる。全員に当事者意識をもたせることは、資質・能力を育てる上で、大切なポイント

である。

図11 児童Cの振り返り

図12 児童Dの振り返り

【成果2】

卒業単元を開発したことにより、卒業に関わる各活動の意義が児童と共有された。また振り返りの工夫により、他者と協働して課題を解決したという意識を児童にもたせることができた。

図13の児童Eは、「最後にみんなの心が一つになった気がします。それは、違う委員でも相互に良いところ、がんばっているところを認め合い、できないことをカバーし合った結果だと思います。」と記述している。互いのよさや多様な考えを認め合い、合意形成を通して他者と協働して課題を解決することができたことを振り返っている。卒業に関連する活動間の関係性や意義を児童と共有して進めた単元を開発することがこのような児童の育ちを支えたと考えている。

また、振り返りの視点を「実行委員会があったからこそ実現したこと」という視点にして、自分の実行委員会も含めた全ての実行委員会の価値を振り返った。このことによって、他者と協働して課題を解決してきた過程の価値を再認識することができたと考えている。

図13 児童Eの振り返り

【成果3】

教えることと、考えさせることを明確化したことによって、児童自身が自分たちの取組の質の高まりを感じる事ができた。

図14の児童Fは、卒業式言葉実行委員会について「実行委員の人がことばを考えてくれたから、みんなで考える時間を無くして練習に費やせた」と振り返っている。教えることと考えさせることの明確化によって、実行委員会の提案が工夫され、その結果取組の質が高まったことを示している振り返りである。主体的な学びを機能させるために、重点をどこに置くかということ意識することは有益であると考えられる。

また卒業式練習において教えることの評価規準を明確化し、児童と共有したことも効果的だった。評価規準を児童と共有することが児童の主体的な学びを支えることにつながると感じている。

本研究を通して、合意形成を図る上で有効だった児童の様相(表8、9)を明らかにしたことは教員にとっての成果でもあった。今後、合意形成の支援を考える上での教師の視点となり得る。

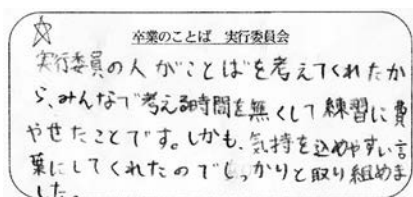


図14 児童Fの振り返り

【課題1】

実行委員会の数を増やすことで、支援する教員数が多くなるため、人員確保が難しい。

全員が実行委員に所属し同時に活動することは意義も大きいですが、その支援に関わる教員の人数も多くなる。専門性が必要な支援の必要性を考えると、学年部の教員だけでなく専科の先生に協力いただくなど、支援者を組織する方法を

多様に考える必要がある。

【課題2】

教えることと、考えさせることの明確化は難しく、教員の話し合いに多くの時間がかかった。

対象とする児童、内容、時間数などによって教えること、考えさせることは異なる。目の前の児童にとっての最適解を見つけるために、本実践では教員間で何度も話し合いをすることが必要だった。しかしその話し合いこそ教師の力量形成の上で大切な経験だとも考えている。今後、学校全体での共有が進んでいくと、理念や方法の共有にかかる時間も少しずつ減らすことができるのではないかと考えている。

V おわりに

本研究で開発した卒業単元は新しい活動を導入したのではなく、これまで本校で関係性が十分整理されていないまま実践されていた各活動等を整理し、単元化したものである。「どんな資質・能力」を「どのような学習過程を通して」育てていくかという視点でこれまでの実践を見直すことの価値が、児童の姿から改めて分かった。この視点は、特別活動だけでなく他の教科の授業においても大切である。

今後は本研究の成果を共有し、全校での取組につなげていきたい。資質・能力向上のための主体的な学習の在り方について、教員間で考え続けていくことが児童の資質・能力を更に向上させることにつながると考えている。本校ではその取組は始まっており、運動会の実行委員会において本研究で効果的だった主体的な学びを機能させる三つの場の設定を行った。今後も教育活動の質を高める取組を学校全体で考えていきたい。

〈引用・参考文献〉

文部科学省(2017). 小学校学習指導要領解説 特別活動編. 日本文教出版株式会社